

日本細菌学会 関東支部ニュース

第13号

第64回日本細菌学会関東支部総会の開催に当たって

総会長 山口 英 世
(帝京大学医学部医真菌研究センター)

第64回日本細菌学会関東支部総会の開催を2ヶ月後にひかえ、何やかやと準備に追われている昨今です。

戦後間もない昭和22年に発足した支部総会は、以来40余年にわたってきわめて大きな役割を果たしてきました。関東支部は日本細菌学会の数ある支部のなかでも、全会員の過半数が所属する最大の支部であります。そのために関東地区を中心としながらも広く国内の病原微生物学— 狭義の細菌学のみならずウイルス学、真菌学、免疫学などの周辺領域も含めて— にかかわる研究者の主要な学術交流の場として、斯界の発展に著しい貢献を果たしてきたことは改めて申し述べるまでもないところです。

20世紀における医学研究の最大の成果の一つといわれる抗菌化学療法の驚異的な進歩にもかかわらず、細菌感染症は大きく変貌しながらも依然として人類の生命や健康を脅かす主要な疾患であり続けております。したがって、病原細菌学の重要性は決して低下するものではなく、研究の一層の発展が望まれるゆえんでもあります。近年急速に進展した分子生物学、遺伝子工学などの方法論が導入され、細菌学の研究にも新たな局面の展開と大きな飛躍が期待されております。現に関東支部に属する研究機関からもこうした手技を駆使したすぐれた成果が輩出しつつあることは、誠に慶ばしい限りであります。しかしながら、こうした状況とは裏腹に、最近支部総会がいささか低調気味ではないかと憂える声が支部



のなかからも少なからず上がっております。とくに若い会員の方々からの出題や参加が減少傾向にあることが懸念されます。もしこの状況が続くとすれば、わが国の病原細菌学の将来にかかわるゆゆしい問題にもなりかねないと危惧するものであります。

長い歴史を持つだけに、わが関東支部総会のプログラムや運営がいささか硬直化、マンネリ化したきらいがあるとの指摘は、残念ながら認めざるを得ません。とくに近年総会長を務められた各先生はこの点に苦勞され、若手研究者の支部総会離れを何とか喰い止めようと、様々な創意工夫をこらされて特色ある総会を開かれたことはご承知の通りであります。一方、徳永支部長をはじめとする現支部評議員会は、支部総会の活性化をはかることを最重要課題とし、将来計画小委員会(河野恵委員長)および学術集会小委員会(川上正也委員長)を中心に精力的に検討を重ねてこられました。私も何度か討議に参加させて頂

き、最終的に以下の点に目標を置いて総会プログラムを組むことにしました。

(i) 多数の会員、とくに若い方々が、気軽に発表でき、その方法論、データの解釈、今後の研究の進め方などについて演者と参加者との間で自由に討論できる。

(ii) 会員がカバーするあらゆる分野から、たとえ現時点では完成度が低くとも今後の発展が期待できる研究内容をもった演題が多数出題される。

(iii) 会員のみならず会員外の方々のできるだけ多数の参加を図り、境界領域ともいえる他の細菌学分野との交流を促進する。

これをどのように具体化するか種々思案した結果、前例のないことですが、次のような実施案を計画し、準備に入りました。すなわち、病原細菌群ごとに予め16の主題を用意し、各主題ごとに研究の第一線にある中堅クラスの先生にモデレーターをお願いし、モデレーターを通して会員外からも広く演題を集めてシンポジウムを編成する、また発表はすべてポスター形式で行うというものです。無論そのほかに従来通り一般演題も募集し、応募演題は該当する主題のシンポジウムに組み込むかまたは新たな主題を設けてシンポジウムにまとめることにしました。幸いこの案は、評

議員会の全面的なご支持とモデレーターになって頂いた各先生の熱心なご協力を得ることができ、同封プログラムに示されておりますように、質量とも予想以上にすばらしい内容のシンポジウムが出来上がりました。モデレーターならびに出題された先生に心から感謝申し上げる次第です。

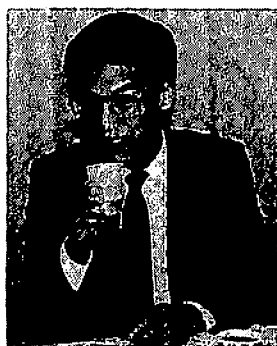
これらのポスターシンポジウムに加えて、わが国の一般微生物学および応用微生物学の領域で先駆的業績をあげられ、現在もこの分野の研究の指導的立場にあってご活躍中の斉藤日向、別府輝彦両教授を特別講演にお招きし、それぞれのご専門に関するお話をうかがうことにしました。病原微生物学とは別の視点に立った思考やアプローチは、私共に新鮮な刺激を与えて下さるものと期待しております。

このように支部総会のかたちは十二分に整いましたが、この「試み」が本当に成功するかどうかは、実際に蓋を開けてみないと分かりません。正直なところ、小生自身大いに不安です。何卒会員の皆様には私共の意図をご理解賜り、一人でも多くご参加頂き、活発なディスカッションを通してこの総会を盛り上げて下さいますよう心からお願い申し上げます。

浅川賞を受賞して

中 江 太 治 (東海大学医学部)

実験室の片隅でサルモネラの外膜から蛋白を分離しようと試みている一人の男が居た。膜を界面活性剤に可溶化しようとしてTriton X-100やSDSを用いて色々試みているのだけどもどうしてもどうした事か外膜タンパク質を完全に可溶化する事は出来なかった。彼は以前にサルモネラ外膜の透過性を調べたところ、この膜には分子量約700程度以下の糖質を透過させる孔がある事を確認していた。しかし彼の努力とは裏腹に外膜タンパク質の一部は依然として可溶化されなかった。そこでこの男は仕方なく界面活性剤に可溶化出来たタンパク質を使って前に確かめた外膜に存在する透過孔の存在を無細胞系で確認する実験を組む事にした。ここで彼は一つの難問に



ぶつかった。それは外膜を人工膜にどの様にして組み込むかという事と蔗糖等の低分子物質の透過をどの様にして測定するかという事の2つであった。そこで彼はあらゆる手段を

用いて、またまた文献を調べ、人工膜に外膜成分を組み込もうとするのであるがこの膜の透過性を *in vitro* で再現する事は出来なかった。

困り果てた彼はある日、ふと非常識とも思える考えにとらわれた。それは膜タンパク質の多くはリン脂質二重層の中に埋まっているのだから水が存在しなくても変性しないのではないかという思いである。そこで彼が行った多少乱暴とも思える実験は次のようなものであった。界面活性剤で抽出した外膜タンパク質を蒸留水に対して透析して界面活性剤を除いておき、これとは別に形成しておいたリポソームを混合してこの混合物を試験管の底に乾燥させた。この乾固物を [^{14}C]-蔗糖や [^3H]-デキストランを含む緩衝液に浮遊させた。こうすれば外膜蛋白を含むリポソームの中に [^{14}C]-蔗糖や [^3H]-デキストランが取り込まれるはずである。この人工膜を用いてこれらの物質の人工膜からの流出を測定したところ [^{14}C]は [^3H]よりも約10倍程度多く流出していることがわかった。彼はこの実験結果を研究室の仲間に話した。意見は大きく2つに分かれた。1つは実験手技が乱暴なのでタンパク質は変性しているに違いない、だから実験結果は信用できないという者と、他の1つは実験の手技は理論にかなっているし、また実験結果は素晴らしいものであるとする者であった。他人による実験結果の善し悪しの

評価をよそに、彼には妙に不満足なものを感じる何かがあった。それはもし以前に経験した外膜の透過性が *in vitro* で再現できたものならばその活性はこの程度のものではないはずであるという根拠のない感じであり自信であった。しばらくして彼は突如として閃きのようなものを感じた。それは今まで抽出できずに捨てていた外膜成分こそが透過孔形成蛋白であるに違いないという考えであり、そして彼はもはやこの事を信じて疑わなかった。次の日から彼は黙々とこのカス拾いを始めた事は云うまでもない。

平成2年3月28日 徳島大学医学部大塚講堂で平成元年度日本細菌学会の浅川賞を授賞しました。このエピソードはその対象となった研究「細菌外膜の溶質透過性の研究」の始まりの部分を書いたものです。それからほどなくして私は東海大学医学部に職を得、この仕事を発展させる事が出来ました。その1つは緑膿菌外膜の透過性と抗生物質透過性の関係を明らかにし、緑膿菌の薬剤耐性の理解に役立てた事であろうと考えます。私がこのような研究を手がける事が出来たのは二階堂薄先生のご指導によるものであり、また東海大学でこれらの研究を継続できたのは佐々木正五先生の暖かい支援と有能な共同研究者に恵まれたからに他なりません。有り難う御座います。

関東支部活性化のために

— 支部会則改訂の評議員会案 —

細菌学会関東支部会の活性化のために、関東支部ニュース誌上にもこれまでさまざまな提案が掲載されてきました。現評議員会においても、毎回の評議員会で、あるいは将来計画小委員会、学術集会小委員会、支部ニュース小委員会においても、活発に支部の活性化方策について論議が行われてきました。

活性化の第一の方策は、何といたっても春秋の支部総会の活性化にあります。これまでの総会も総会長の方々の御苦心で夫々有意義なプログラムがもたれたことはもちろんですが、現評議員会のもとに企画された2度の支部総

支部長 徳 永 徹

会、および近く開催されようとしている支部総会（第62回、63回、64回）の内容を見ていただくと、夫々大変斬新なやり方で、これまでの支部総会の定型的なパターンを大きく変えるものでした。これは、橋本一、渡辺武彦、山口英世、各総会長の個性と御努力に依ることはもちろんですが、評議員会の支部活性化への熱意が3総会長を支えた面もあったかと思えます。

スタートの当初は、演題数が少ないために春の総会を廃止しては、という声も耳にしたのですが、去る9月1日の評議員会では、春

の総会は4月の本部総会に出題した演題も再度出題できるようにして、大いに学問的な討論を行うため、秋の総会並に2日間開催しては、という意見が多数出されました。若い学会員の熱気が感じられて、支部長としても嬉しい議論でした。

前号の支部ニュースに、評議員数の変更の問題が掲載されていますが、9月1日の評議員会でも、将来計画小委員会の原案をもとにして、この問題が大いに議論されました。その結果、支部活動の活性化のためには、評議員数が増えることが望ましいが、余り多過ぎても運営上支障があるとの共通認識から、次のような会則改訂案が満場一致で可決されました。

現行支部会則は、支部総会の講演抄録の末尾に毎号掲載されていますので、それを御参照いただきたいと思います。今回の改正案の骨子は、その第6条で、現行の評議員15名を21名にし、また役員の内任期継続を2期までと限定したことにあります。その文案は次の通りで、アンダーラインした箇所が改訂部分です。

「6. 本支部に次の役員を置く。

支部長1名、評議員21名、幹事若干名。

評議員15名は公選とし、支部長は評議

員が選挙する。選挙細則は別項にかかげる。必要あれば支部長は別に評議員として6名以内を推薦し、評議員会がこれを決定することができる。

(中略)

役員の内任期は3カ年とし、重任を妨げない。但し3期連続して選出されることはできない。(以下略)」

この改訂案に基づき、選挙細則の方も、「評議員の選挙は単記無記名投票でおこない、有効投票数の多いものから15名を当選者とする。」と改訂されることとなります。

その他の点についても種々論議がありましたが、今回の改訂は以上にとどめることになりました。尚、この改訂案は来る11月14日の支部総会時に会務総会において審議され決に付されることとなります。もしも可決された場合には、次の評議員選挙は来年7月に予定されていますので、その時点からこの会則が実施されることとなります。

支部活性化のために、また細菌学の発展のために、一人でも多くの会員の方々の学術総会並びに会務総会への御参加をお願いいたします。

フォーラム

若年研究者はロートル研究者からマイクを奪え

国立衛生試験所

三瀬 勝利

細菌学会は私にとってもっとも重要な学会であり、おつき合いも30年近くになる。私の入会したころはRプラスミド研究の華やかなりし頃であった。最初に出席した本学会の支部総会で、若手の東大のY助手(現在は本学会の重鎮であり教授)が、某教授に向かって、つかみかからんばかりのキビシイ調子で一歩もひかず質問を続けていられたことを今でもあざやかに記憶している。こうした学問の前では上下関係を無視して自由な討論を行う民主的な空気が、本学会をして当時もっとも活

動的な学会たらしめ、かつRプラスミド研究の面で世界の学会に大きな影響を与えた理由になったと思っている。

私は毎年ほとんどすべての総会に出席してきたが、この所出席率はあまり良くない。それは最近試験管をにぎるよりは、会議中に恩師の中谷林太郎教授直伝の<いねむり>をきめてむ時間の方がずっと多くなってきたためである。しかし時折足を運ぶ細菌学会総会でも、質問者の顔ぶれはあまり変化はなく、違和感はない。若き日のY教授のような勇ましい若手が少ないのは、— Y教授が例外的存在なのだ— という意見も有力であるが、— 淋しい限りである。

自分の経験を言わせてもらおうと、人間も50

歳の声を聞くと、口舌の活動に反比例して、頭脳の活動はかなりお粗末なものになってくる。これに山のような雑用が頭脳の活動の強力な阻害剤として作用する。一応営業政策上、部下の前では何でも知っている様な顔をしているが、少数の例外はあるにしても、50歳以上の研究者の内情はなかなかタイヘンなのである。こうした50台や60台のロートルばかりに、学会で発言させておいて良いのだろうか？

近頃の細菌学会の若手はお利口になられたのか、それとも身分関係を学会に持ち込まれる習性がついているのか、我々ロートルがトンチンカンな意見をのべても、反論されないケースが多い。ロートルがトンチンカンであるのは生物学的な衰えを反映しているだけで、格別非難されるべきものではない。むしろ反論しない若手の方に問題がある。社会生活において年上者に敬意を表するのは礼儀であり絶対に守らなければならないが、真理と礼儀を混同してはならない。細菌学会では討論には身分関係を持ちこまない民主的な伝統がある。若い人は自己の研究にほこりと勇気を持って自分の意見を主張して欲しい。それが学会の発展につながるし、ロートルの老化防止にもなる。学問上の反論が出世のさまたげになることはない。第一それほど強力な力を駆使出来るロートルは、本学会にはいないはずである。

SPF 動物を汚染している 黄色ブドウ球菌

帝京大学医学部・動物実験施設
田村 弘

私は、医学部の動物センターで、多くの研究者の実験動物をサポートするようになって17年になります。その間、種々の動物に様々な感染症の発生を経験し、それぞれに対策を講じてきましたが、いまだ解決のついていない気掛かりな問題が幾つかあります。その一つが、マウスにおける黄色ブドウ球菌の汚染です。

現在、種々の実験に用いられているマウスは、そのほとんどがSPFまたはBS動物といわれるもので、アイソレーター内の無菌マウスに人為的に作られた正常細菌叢を定着させ

たのち、消毒された衛生的な飼育室に移し、滅菌した餌と水を給与し、可能なかぎり衛生面に配慮した着衣を身につけた飼育者によって生産された動物で、マウスに病原性をもつ微生物が検出されないことが確認されている動物ということになっております。また、SPFマウスは実験の場でも育成環境に近い衛生的な環境で飼育されています。しかし、このようなマウスが、生産の場で、既に黄色ブドウ球菌に汚染されており、適切でない飼育管理はマウスに黄色ブドウ球菌による慢性の皮膚炎や、四肢末端や尾の壊死を招くことになり、分離される黄色ブドウ球菌を、その菌で汚染されているマウスの皮下に注射しても皮膚炎を発症し、静脈内に接種すると腎臓に膿瘍を形成するのですが、これらの事実は、意外に知られておりません。マウスから分離される黄色ブドウ球菌は、他の動物由来の黄色ブドウ球菌とは異なる性状を幾つか持っております(注)。一方、コンベンショナル(CV)なマウスからは、ほとんど黄色ブドウ球菌は、分離されません。滝沢ら(1960年、実験動物, 9, 175p)もCVマウスから黄色ブドウ球菌は、分離できなかったと述べています。つまり、病原体が可能なかぎり存在しない、健康で正常な動物の作出を目指した結果が、皮肉なことに黄色ブドウ球菌に汚染されたSPF動物を作り上げてしまったということなのです。

そこで、私どもは、SPFマウスにおける黄色ブドウ球菌が汚染(定着)してしまう原因の一つは、無菌マウスに各種の菌を定着させ、人工的に正常細菌叢を構築する段階に問題があると考え、今年から、東大・農・伊藤らが中心になって、SPFマウスに黄色ブドウ球菌の汚染を許さない正常細菌叢を作出するための検討を行っております。

細菌学会で報告される講演の中には、黄色ブドウ球菌の汚染を念頭において処置されたほうがよいのではないかとと思われる実験が、時々みられます。なお、マウス由来の黄色ブドウ球菌は、私の経験では、ほとんどの抗生物質に高い感受性を持っていました。

注：田村ら、実験動物, 34, 147., 清水ら、
実験動物, 34, 155., Shimizu et al.,

第19回薬剤耐性菌シンポジウムを 終えて！

薬剤耐性菌研究会代表
橋本 一

第19回薬剤耐性菌シンポジウムは平成2年8月23日～25日、群馬県伊香保観山荘で行われた。特別講演3題、一般講演15題、例年の如く討論時間を充分とり、コーヒープレイクの時も、2夜の2次会3次会の席でも活発な話し合いが行われた。2日目の午後2時半以後は自由時間とし、各自伊香保界限、榛名山などに連れだって散策も楽しんだ。

この会の特徴は、大学、研究所の人々はもとより製薬会社の研究室、病院の医者や中央検査室の人々も交えて疫学から分子生物学まで広汎なテーマで話し合えるところにあり、演者が次々に座長になり、特別講演も臨床と基礎と1題づつという構成をとっている。これまで企業からの寄付をいっさい受けない運営をしてきたのでスライド係も参加者に交代でお願いし、宿舎は公的機関で安く、いわゆるオエラ方への気遣いのない会にして来た。今年久しぶりに温泉にひたりながら、という声のもとに赤城から伊香保に会場を移し、たまたまハンガリーNIHの部長が来日中なので特別講演を1題追加した。

そもそも生物学における基本概念は生命の多様性、普遍性、連続性（進化）と考える。薬剤耐性の研究もそれらの観点からみることが出来よう。薬剤の広汎な使用による耐性菌の増加は例年の如く疫学で発表され、病院を異にし、地域を異にし、又国を異にした諸段階が伺われた。第2世代以降のセフェムも新キノロンも広く使われていないハンガリーの耐性菌の現状は、MRSAの減少傾向にみられるように10年以上前の日本の状態を思わせるし、水よりの多剤耐性サルモネラが多いことは衛生管理の難しさを語っていた。第2の特別講演で小野寺博士（慈恵）が新キノロン剤耐性菌が薬剤の使用と共に年々増加し、長期カテーテル例に高度耐性菌が多いことなどが語られたが、これはいずれの大病院でも同じ傾向である。simulation systemを用いた実

験も加えてキノロン耐性化の種々な臨床分離株の発表も多かった。耐性機構の多様性と共に遺伝学的背景も染色体性プラスミド性が入り交じり、菌側も多様に化学療法に抵抗している。

薬剤は異なっても耐性機構は不活化と作用点の変化と非透過性であり、それらに関係する諸タンパクも微妙な多様性があり、その違いを縫って耐性菌にも効く新薬が登場したりする。マクロライドを例にとってもリボソームのメチル化という古典的な耐性機構に対して、加水分解やリン酸化など次々に新しい酵素が紹介された。その内に新キノロン不活化酵素も登場することであろう。

今回のシンポジウムの圧巻は特別講演第3の杉中秀寿教授（広島大・歯）による「黄色ブドウ球菌の産生する自己溶解酵素の機能」であった。氏はStromingerの所に留学しSprattに先駆けてペニシリン結合タンパクが2種以上であることを初めて見いだした人である。緑膿菌の不活化によらないβラクタム耐性も氏が初めて発表した過去がある。20種類以上もある自己溶解酵素の進化の過程は将来の課題であろうが、1つ1つの精製作用機構の解析は明解で示唆に富むものであった。ペニシリンによる溶菌が、自己溶解酵素の阻害因子であるLTAを不活化して遊離させるためという考察や、いわゆるブドウ状の菌塊をバラバラにしたりそれを阻害したりする機構のスライドなど、印象に残る研究の話はシンポジウムの何よりの楽しみである。

来年の第20回は一つの区切りであり、盛大な構成を目指しています。皆様のご参加をお待ちしています。

ある防衛省捜査官の最期

東京女子医大・微生物学教室
内山竹彦

防衛省Marilyn捜査班は、常になく長い会議を終えようとしていた。彼女はまだこの国に進入した形跡はないというのが出席した探偵たちの結論だった。Marilyn捜査班は事件を予想して、防衛省の設立当時から組織されていた。彼らはまだこの指名手配のMarilynに出会ったことはなかった。しかし、あの伝

説的な女優のイメージは探偵たちの彼女に対する親和力を強めていった。捜査班の指揮官 T. Enhan. Marilyn は冷静沈着な男である。B. Antibo. Marilyn は無りょうの時、拳銃をぶっぱなす欲望に駆られた。しかし、それは指揮官の許可なしでは許されぬことであった。捜査班には、そのほか T. Suppre. Marilyn と密偵マックがいる。T. Suppre. Marilyn は二人の探偵の動向を監査する役である。マックは怪しい者が侵入すればすべて彼ら探偵のもとに連行した。しかし、探偵たちはまだ見ぬ Marilyn 以外の者はすべて無視した。

会議の締め括りとして、T. Enhan. Marilyn は最近友人に起こった恐ろしい事件についてその概略を説明した。Staph. Aure という昔からいるテロ集団にショックトキシンという新しい毒ガスを打ち込まれた T. Enhan. Nijumensoh のことだった。かたはある快盗を逮捕した功績によって現在気楽な身分であったが、毒ガスに被曝したとたん狂ったという。狂いに狂って自曝し、そのため彼の駐屯地は破壊してしまっただろう。どうしてそんな事が起こったんでやんしょう、とマックは尋ねた。はっきりしないが、すべての T. 捜査官が狂うのではないらしいと T. Enhan. Marilyn. 彼はさらに声を潜めて、我々はほかの捜査班に監視されているらしいことを告げた。しかし我々もある捜査班を見張るように上から言われている。何のために？ 我々も怪しいというのか？ とにかく理解できない事が多すぎる、気を付けよう、諸君。

防衛省歴代の長官職は、Pasteur 氏、Ehrlich 氏、Burnet 氏、Jerne 氏らが襲った。防衛省の現在の複雑かつ巧みな機構は彼らと多くの人々の提言によって形成されてきた。この組織は矛盾が多くてまだ完全ではない、と T. Enhan. Marilyn は秘かに思っていた。しかし、この矛盾はこの国の、従って防衛省の成立過程に生じた必然的矛盾であるとも感じていた。矛盾の中に真理が隠されている。T. Enhan. Marilyn は何時になく深く考えこんだ。

7月6日とうとう心配していた事件が発生した。T. Enhan. Marilyn が目を覚ましたとき、摂氏39度を越す異常な気温の上昇と共に、

防衛省第一駐屯所付近に天空に黒煙が昇るのが認められた。昨夜、Staph. Aure の一味が襲って来たという。

今日、B. Antibo. Marilyn とマックは不穏な動きを見せていた。T. Enhan. Marilyn は、自分たちの出番ではあるまいと思いつつも、後学のためにと T. Enhan. Lupin の率いる Lupin 捜査班の探偵を誘って現場に近づいた。現場の近くに来た時、T 捜査官たちには直接の影響を示さない毒ガスが多くの B 捜査官や密偵達の体に吸着し、妖しい光を放ち始めた。T. Enhan. Lupin は想像を絶する出来事を目にした。何と、あの沈着冷静な T. Enhan. Marilyn が B. Antibo. Marilyn やマックに、さらに、B. Antibo. Lupin らに付着した光を見て興奮し始めたのだ。見る間に彼は肥大化かつ複数化した。彼はしばらく自らの奇怪な変容に抵抗を試みたが、やがて理性を失い、カインと呼ばれる精気を大量に放出した。カインは刃りを覆い尽くし木を枯らし家を焦がし始めた。T. Enhan. Lupin はよるめきながら逃れて行った。

T. Enhan. Lupin 作成の“Staph. Aure 一味襲撃事件”報告書の概略。(1) Staph. Aure 一味の放出するショックトキシンは B 捜査官や密偵たちの体の一部 MHCII に結合し、一部の T 捜査官はこの結合トキシンを見ると理性も肉体も狂ってカインを放出し尽くす。(2) カインは適量だとこの国の防衛機構に有益だが、過量だと害をなす。カインを出し得る我々 T 捜査官はより一層の自覚と精進が要求される。(3) 我が国の捜査班相互の監視体制をより明瞭にすべきである。(4) ショックトキシン感受性は探偵の眼力の質的差異によるらしい。(5) Marilyn に一度は T. Enhan. Marilyn の前に現れてはしかなかった。合掌。

難しい議論を離れて微生物や免疫学の scientific fiction の世界に遊ぶことも学問の発展には必要でありましょう。



議 事 録

●第6回評議員会

日 時：平成2年6月2日(土) 14時～17時

場 所：国立予防衛生研究所 第一会議室

出席者：新井俊彦，五十嵐英夫，池田達夫，岡村登，金森政人，北野繁雄，川上正也，河野恵，笹川千尋，島村忠勝，三上襄，渡辺武彦(第63回支部総会長)，山口英世(第64回支部総会長)，徳永徹(支部長)，島田俊雄(幹事)。

欠席者：高橋昌巳，鶴純明，久垣和仁，光岡知足，中村明子(幹事)。

議 題：

1. 第63回支部総会準備状況報告

渡辺支部総会長より準備状況について報告があった。

2. 第64回支部総会準備状況報告

山口支部総会長より準備状況について報告があった。

開催日：平成2年11月13日(火)，14日(水)。

場 所：アルカディア市ヶ谷(私学会館)。

内 容：特別講演2題を予定している。斉藤日向教授(帝京大・医)「微生物遺伝学の回想」，別府輝彦教授(東大・農)「微生物の基礎とその利用—蛋白分泌と二次代謝制御を例として」

ポスターシンポジウム発表形式を計画し，病原微生物群ごとにセッションを設け，各群若手，中堅のモデレーターを置き，招待演題および一般演題をまとめて，ポスター展示ならびに総括討論を行う。内容については各モデレーターに一任するが，基本方針としては特に若い人の発表を集めたい。

参加費および抄録費は従来どおりとし，懇親会は最終日の発表終了後に行う予定。

3. 第65回および第66回支部総会長選出の件

出席した全評議員による選挙の結果，第65回総会長候補者として河野恵教授(東薬大)，第66回総会長候補者には中野昌康教授(自治医大)が決定した。なお，交渉は徳永支部長が当る。

4. 会計監査選出の件

出席した全評議員の推薦により，笹川評議員および五十嵐評議員が会計監査に選出された。

5. 各小委員会報告

○支部ニュース小委員会(島村委員長)

支部ニュース12号は4月末に発送した。

13号は総会プログラムを同封して9月末日に発送する予定である。内容は，第64回支部総会長の挨拶，浅川賞授賞者の紹介，支部のあり方に関する話題，フォーラム欄，ミニニュース，各種集案案内等を予定している。

○学術集案小委員会(川上委員長)および将来計画小委員会(河野委員長)では支部会則改訂(評議員定数改訂等)に関して討議がなされた旨報告された。なお，評議員の選出方法，任期，定数の改訂の詳細に関しては次回の評議員会でさらに討議を行うこととなった。これらに関しては将来計画小委員会案を9月発行の支部ニュースに掲載することとなった。

6. その他

1) 第5回評議員会議事録の確認

●第7回評議員会

日 時：平成2年9月1日(土) 14時～17時

場 所：国立予防衛生研究所 第一会議室

出席者：新井俊彦，五十嵐英夫，池田達夫，岡村登，金森政人，北野繁雄，川上正也，河野恵，島村忠勝，鶴純明，久垣和仁，山口英世(第64回支部総会長)，徳永徹(支部長)，島田俊雄，中村明子(幹事)。

欠席者：笹川千尋，高橋昌巳，三上襄，光岡知足。

議 題：

1. 第64回支部総会準備状況報告

山口支部総会長より準備状況について報告があった。

1) 支部会員全員に「第64回日本細菌学会関東支部総会のご案内ならびに演題募集」のパンフレットを7月に送付した。

2) 学術プログラム日程表，ポスターセッション，シンポジウム演題，一般演題の収集状況および会場についての詳細な説明がなされた(別紙)。一般演題は可能なかぎりシンポジウムに繰り込む方針である。

3) 商業展示に関しては未定である。

2. 各小委員会報告

○支部ニュース小委員会（島村委員長）

支部ニュース13号は9月末日発送予定。
内容は、山口第64回支部総会長の挨拶、中江教授（東海大医）の浅川賞受賞、その他。

○学術集会小委員会（川上委員長）

今期は今後の学会開催について検討してきたが、次の点に重点をおいて開催すべきであろうとの結論を得た。

- 1) 学会への参加者を増大する。
- 2) 討論を活発にする。特に若い人が参加し活発な討論の出来る集会が望まれる。具体的には、第64回総会で山口総会長が企画されたように、ポスターを活用する方法があろう。推薦演題をまとめて発表し、それに対して十分な討論を行うことによって意欲的な研究を引き出す可能性がある。

3) 新しいトピックスを選んで勉強する。教育講演をとり入れ、若い人々の研修の場とする。教育講演をうまく活用することが望まれる。

4) 一般演題を増やす方法としては、既に発表したものでも別の観点から再度発表してもよいのではないか。春の総会でも一般演題の募集をすべきではないか。

3. 平成2年度決算報告

平成2年度決算報告書（別紙）に基づいて支部長より報告があった。但し、本会計年度末（9月30日）までには更に1ヶ月もの日程が残っているため、本報告は中間報告とする。最終的な決算報告については会計監査を受けた上で評議員各位へ郵送し問題点の指摘を受けたのち平成2年11月13日（火）の評議員会で、再度報告し承認を受ける予定。

4. 平成3年度予算案の件

平成3年度予算案（別紙）について支部長より編成の方針案の説明がなされた。討議の結果、総会開催費は50万円から60万円に増額された。また支部ニュース発行費を25万円から30万円に増額した。

5. 支部会則改訂の件

将来計画小委員会の河野委員長より支部会則変更(案)の要旨説明がなされた(別紙)。討議の結果、会則改訂の主旨説明および改訂箇所についての「評議員会案」を支部ニュース13号（9月末日発送）に掲載することとなった。

6. その他

- 1) 第6回評議員会議事録の確認
- 2) 前回の評議員会において第65回および66回支部総会長に河野恵教授（東薬大）および中野昌康教授（自治医大）が推薦され徳永支部長が交渉した結果、両氏とも受諾された旨の報告があった。

以上

[お知らせ]

★関東支部では学術集会補助を目的として補助金「1万円とハガキ100枚」を準備しております。補助金をご希望される学術集会主催者は関東支部事務局（国立予防衛生研究所、徳永支部長）にお申し込み下さい。

★関東支部支部ニュース小委員会では「支部および評議員への要望、会員間の意見交換、その他随筆などの発表の場」として、支部ニュースを大いに活用していただくために、会員からの投稿を受付けています。原稿（1200字以内でお願いします。短くても結構です）は関東支部事務局までお送り下さい。

◇編集後記◇

△…2年連続して浅川賞受賞の記事を掲載できましたこと、編集子としてたいへん嬉しく思いました。

△…フォーラム欄にはユニークな原稿が集まるようになり、楽しい読物になってきたと思います。しかし、そのほとんどが依頼原稿です。多くの会員の皆様からもっと自由にご意見をお寄せいただければありがたいのですが。

△…本号では研究会紹介欄が活用されませんでした。特に、新しい研究会を主催される会員の方はぜひお知らせ下さい。

日本細菌学会
関東支部ニュース
第13号
(1990.10.1)

発行：日本細菌学会関東支部
〒141 東京都品川区上大崎2-10-35
国立予防衛生研究所
☎ 03-444-2181
